

論文の和文要旨

論文題目

「ロシア語の一致・不一致についての共時的・通時的的研究」

氏名

秋山 真一

本稿の目的は統語論的な観点に基づいて、ロシア語の文における主語と述語との一致・不一致、とりわけ主部に数詞句を含む文の主語と述語との一致・不一致に関する分析を行うことである。

ロシア語の統語論では主格主語と述語との間で人称・性・数のカテゴリーに応じた一致を起こすのが普通であるが、主部に数詞句を含む文では（例 1）（例 2）のような揺れが見られる。

(例 3) *Rabotaiom* *cto* *человек.* (ГПИП2001:37)
Rabota-ût *st-o* *čelovek.*
work-PRES.3PL hundred-NUM.NOM people-PL.GEN

「100 人が働いている」

(例 4) *Rabotaem* *cto* *человек.* (ГПИП2001:37)
Rabota-et *st-o* *čelovek.*
work-PRES.3SG hundred-NUM.NOM. people-PL.GEN

「100 人が働いている」

こうした揺れは述語の非過去時制で（3 人称単数 vs 3 人称複数）、過去時制で（中性単数 vs 複数）という形態の揺れとなる。

本稿は第 1 章においてロシア語の文における主語と述語との一致・不一致の揺れという現象について概観した後、第 2 章において現代ロシア語 Modern Russian（以下 MR）を題材としてその現況を分析する。分析の際にはコーパスデータを用いて計量的に分析し、その要因について統計学的検定を用いて整理し、さらにはその要因間の影響度について多変量解析を用いて回帰分析を行う。

第 3 章ではその題材を現代ロシア語の礎となっている古代教会スラブ語 Old Church Slavonic（以下 OCS）および古代ロシア語 Old Russian（以下 OR）に求め、スラブ世界において現存する最古期の文献である 11 世紀後半の教会文献における主語と述語との一致・不一致の揺れを分析する。方法論は第 2 章で用いた分析方法を援用する。

第4章では現代ロシア語 MR に対して、古代教会スラブ語 OCS・古代ロシア語 OR がどのような影響を歴史的に与えてきたのか、また、与えてこなかったのかを比較対照言語学的手法を用いて明らかにする。

先行研究の指摘から、第2章で MR における主部に数詞句を含む文における述語の単数形・複数形に関する揺れの要因として形態論・統語論・意味論・語彙論・書記法的観点から8つのカテゴリーを定め、それらカテゴリーと述語の単数形・複数形選択との相関性について検定を用いて分析した。カテゴリー内で先行研究により複数の分類法が認められる場合には回帰分析を行い、最適な分類法を整理した。その結果得られた最適な分類法に基づき、述語の単数形・複数形の選択傾向を示すと以下の【表1】のようになった。

【表1】 MR におけるカテゴリー別述語の単数形・複数形選択の傾向

形態論	述語の種類	動詞述語	単数<複数
		分詞述語	単数>複数
		形容詞述語	有意差なし
統語論	主語・述語の語順	主―述の語順	単数<複数
		述―主の語順	単数>複数
		主1―述―主2の語順	単数>複数
	主格 marker の有無 ¹	複数主格 marker あり	単数<複数
		主格 marker なし	単数>複数
それ以外	単数<複数		
意味論	数詞の意味論的数の大小 ²	'два'	単数<複数
		'три'	単数<複数
		'пять'	単数>複数
		'сто'	単数>複数
		'тысяча'	単数>複数
		'миллион'	単数>複数
	数詞と結合する名詞の animacy	活動体	単数<複数
		不活動体	単数>複数
主部内での概数表現の有無	概数あり	単数>複数	
	概数なし	単数<複数	
語彙論	述語が быть の諸変化形態か否か	быть	単数>複数
		быть でない	単数<複数
書記法	数詞の表記法	文字	有意差なし
		数字	有意差なし
		文字・数字の併記	有意差なし

¹ 数詞(+形容詞)+名詞から成る一般的な数詞句には複数主格を表わす形態的特徴を持つ語がないが、数詞句に эти などの限定辞がつくとこれが複数主格の marker となり得る。この状態を「複数主格 marker あり」と呼ぶ。一方、概数の表現方法の1つとして前置詞 около などを用いると、数詞句からは主格を表わす形態的特徴を持つ語が完全になくなる。この状態を「主格 marker なし」と呼ぶ。

² Corbett1978 で提示された分類方法に則り、2を意味する数詞を'два'に、3~4を意味する数詞を'три'に、5~99を意味する数詞を'пять'に、100~999までを意味する数詞を'сто'に、1000~999,999を意味する数詞を'тысяча'に、100万以上を意味する数詞を'миллион'に分類した。

続いて多変量解析の回帰分析を用いて、各カテゴリーが述語の単数形・複数形の選択に与える影響度の大小について確認したところ、その影響度は以下の【階層1】の順に強かった。

【階層1】MR・カテゴリー別述語の単数形複数形選択に与える影響度

主述の語順 > 述語が *быть* の諸変化形態か > 数詞の意味論的数の大小 >
主格マーカ―の有無 > 名詞の animacy > 述語の種類 > 概数表現の有無

第3章ではOCS・ORにおける主部に数詞句を含む文における述語の単数形・双数形・複数形に関する揺れの要因として形態論・統語論・意味論・語彙論的観点から6つのカテゴリーを定め、それらカテゴリーと述語の単数形・双数形・複数形選択との相関性について検定を用いて分析した。

OCS および OR の諸文献で述語の双数形が選択されることと各カテゴリーとの相関を調べたところ、その要因は数2との関連（例えば数12や数200との結合なども含まれる）のみに依拠しているものとみなすことができた。つまり、主部に含まれる数詞が数2と関連することと、述語が双数形になることとの間には必要十分条件が成り立った。

主部に含まれる数詞が数2と関連がある ⇔ 述語は双数形である

一方、述語の単数形・複数形に関する揺れについてはカテゴリー内で先行研究により複数の分類が認められる場合には回帰分析を行い、最適な分類法を整理した。また、多変量解析の回帰分析を用いて、各カテゴリーが述語の単数形・複数形の選択に与える影響度の大小について確認したところ、その影響度はOCSにおいて【階層2】の順に、ORにおいて【階層3】の順に強かった。

【階層2】OCS・カテゴリー別述語の単数形複数形選択に与える影響度

主述の語順 > 名詞の animacy > 述語が *быть* の諸変化形態か > 概数表現の有無 >
数詞の意味論的数の大小 > 述語の種類

【階層3】OR・カテゴリー別述語の単数形複数形選択に与える影響度

数詞の意味論的数の大小 > 主述の語順 > 述語の種類 > 名詞の animacy >
述語が *быть* の諸変化形態か > 概数表現の有無 > 数の表記法

第4章ではMRにおける数詞句を主部に含む文の述語の単数形・複数形選択に与える各カテゴリーの影響と古代教会スラブ語OCS・古代ロシア語ORにおけるそれとを比較対照し、それぞれのカテゴリー別に推測される歴史的な変化を分析した。

MRとOCS・ORとの対照研究から、歴史的な変化は①OCS・ORの時代からMRの現代にいたるまで述語の単数形・複数形の選択に有意な差は見られなかったもの②OCS・ORの時代から現代のMRに至るまでの間に新たな傾向を獲得していったもの の2つに分類することができた。

①-a OCS・OR・MRと一貫して五分五分の揺れが認められる文のタイプ

- ・（動詞の種類）動詞述語をもつ文
- ・（数詞の意味論的数）'пять'に分類される数詞をもつ文
- ・（名詞の animacy）数詞が不活動体名詞と結合している文（名詞が顕在化しない場合は文脈から判断）
- ・（概数表現の有無）主部に概数表現を含まない文

- ・ (数詞の表記法) 数詞を文字で表記している文
- ①-b OCS・OR・MR と一貫して述語の単数形が優勢な文のタイプ
- ・ (述語 **быть**/ **byti** か否か³) 述語が **быть** および **byti** の諸変化形態である文
 - ・ (主語・述語の語順) 述語先行 (述語－主語の語順) の文
 - ・ (主語・述語の語順) 分割文 (主語 1－述語－主語 2 の語順)
- ①-c OCS・OR・MR と一貫して述語の複数形が優勢な文のタイプ
- ・ (主語・述語の語順) 述語後置 (主語－述語の語順) の文
- ②-a OCS・OR での単数形優勢から, MR で複数形も認められるようになった文のタイプ
- ・ (述語 **быть**/ **byti** か否か) 述語が **быть** および **byti** の諸変化形態である文
 - ・ (数詞の意味論的数) 'сто'に分類される数詞をもつ文
 - ・ (数詞の意味論的数) 'тысяча'に分類される数詞をもつ文
 - ・ (概数表現の有無) 主部に概数表現を含む文
 - ・ (数詞の表記法) 数詞を文字と文字以外との併記で表している文
- ②-b OCS・OR での複数形優勢から, MR で単数形も認められるようになった文のタイプ
- ・ (動詞の種類) 分詞述語をもつ文
 - ・ (動詞の種類) 形容詞述語をもつ文
 - ・ (数詞の意味論的数) 'три'に分類される数詞をもつ文
- ②-c OCS・OR での複数形優勢から, MR で五分五分の揺れになった文のタイプ
- ・ (述語 **быть**/ **byti** か否か) 述語が **быть** および **byti** の諸変化形態でない文
- ②-d OCS・OR での五分五分の揺れから, MR で複数形が優勢となった文のタイプ
- ・ (名詞の animacy) 数詞が活動体名詞と結合している文 (名詞が顕在化しない場合は文脈から判断)

また, 述語の種類・主語と述語の語順・数詞の意味論的数の大小・名詞の animacy・概数表現の有無・述語が **быть**/**byti** の諸変化形態か否か, という 6 つのカテゴリー別の影響度の歴史的変化は以下のように整理できた。

- ① 主語と述語の語順: MR (強) は OCS (強), OR (強) の影響度を維持
- ② 述語が **быть**/**byti** の諸変化形態か否か: MR (強) は OCS (中), OR (弱) よりも影響度が強化
- ③ 数詞の意味論的数の大小: MR (中) は OCS (弱) と OR (強) の中間の影響度へ移行
- ④ 名詞の animacy: MR (中) は OR (中) の影響度を維持, OCS (強) からは弱化する
- ⑤ 概数表現の有無: MR (弱) は OR (弱) の影響度を維持, OCS (中) からは弱化する
- ⑥ 述語の種類: MR (弱) は OCS (弱) の影響度を維持, OR (中) からは弱化する

³ MR における **быть** が OCS および OR における **byti** とほぼ同じ役割を担っているものとみなした。